



第 1 編

総

論

主な内容

1. はじめに.....	13
2. 50年史の制作.....	15
3. 日本溶接協会の設立.....	17
4. 協会活動の歴史.....	25
5. この10年の活動と現状.....	34
6. 21世紀に向けて.....	50

第1編 総論

社団法人日本溶接協会は今日ここに創立50周年を迎える。この半世紀という長い期間の区切りは、このこと自体祝賀されるべきことであるが、これを機に過去の50年を総括・評価するとともに、今後の中・長期的展開を思考するという考え方が記念事業の根幹にある。

我が国の溶接技術は終戦当時、米国に比べて30年の遅れがあるともしわれたが、戦後数年のうちに急速な進歩を遂げ、欧米にほぼ遜色のない水準に追いついた。そして、この高度の溶接技術が基盤技術として我が国の産業の復興、特に重厚長大産業の復興に少なからざる貢献をしてきた。そして今後も、この基幹的な溶接技術が各関連産業において成否の重要な鍵であることに変わりはないといえる。

我が国の産業は、明治以降政府の強力な行政指導のもとに、国民が応えて産業の驚くべき成長を見た。この行政の産業振興指導力は、また戦後の産業の復興期においても発揮され、復興に果たした役割は極めて大きかった。その行政指導は産業の種別ごとに分業化され、いわゆる縦割り行政といわれる形態が採られていたので、問題の焦点が絞りやすく、短期解決を容易とする利点があった。

溶接技術も他の製造技術と同様に産業種別ごとの所管で行政指導を受けており、その形態は戦後50年以上経った現在も続いている。例えば、船舶・車輜・自動車は運輸省、一般ボイラは労働省、建築鉄骨・橋梁は建設省、石油タンクは消防庁、発電用ボイラ・同用原子炉は通産省の所掌であり、そしてそれぞれの溶接技術に関する諸規則は各々の行政で制定されている。

1949(昭和24)年、戦後の混乱が治まり、ようやく産業復興の芽生える時期に、このような縦割り行政主導の各産業の溶接を横に結ぶ組織として、横割りの日本溶接協会が誕生したのである。そのお手本は米国の溶接協会あたりにあったのかもしれないが、我が国においては比較的特異な体質を持った団体といえる。